

学生海外調査研究	
スウェーデンの幼児教育プログラム「森のムッレ教室」の理念及び実践に関する現地調査	
氏名 光橋 翠	人間発達科学専攻
期間	2018 年 9 月 9 日～2018 年 9 月 16 日
場所	ストックホルム、ヨーテボリ
施設	ストックホルム大学、野外生活推進協会、ヨーテボリ大学、A 就学前学校、B 就学前学校

内容報告

1. 研究の目的

1.1 研究の背景

平成 30 年度に、『保育所保育指針』『幼稚園教育要領』『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』が改訂された。なかでも『新幼稚園教育要領』には前文が新たに盛り込まれ、「持続可能な社会の創り手となることができるようにするための基礎を培う」という文言が含まれた（文部科学省 2018）。このことにより、幼児期における持続可能な開発のための教育（以下、サステナビリティ教育）の重要性が日本の保育史上初めて認識されることとなった。現在、幼児期のサステナビリティ教育の研究は、国内では少ないものの、国際的には活発化している。特に UNESCO 及び世界幼児教育・保育機構（以下、OMEP）が研究及び試験的プロジェクトを主導しており、一部の関心のある幼児教育学者の国際的ネットワークにより展開を見せている。

なかでも幼児期のサステナビリティ教育の議論において注目されている論点の一つとして、幼児期の自然体験のあり方が挙げられている（井上 2012, Taylor 2013, Elliot 2015, Davis 2014,）。これらの議論では、単に自然に触れる活動をするだけでは、環境教育やサステナビリティ教育とは言えないというのが一致した見解である。そのうえで、どのような自然体験が幼児期に行われるべきかという点については、様々な観点から議論がなされているところである。

そこで、本研究のテーマは、持続可能性について世界で先進的とされているスウェーデンにおける幼児期の環境教育の実践に焦点を当てる。特に、スウェーデンの国民の 5 人に一人は経験している「森のムッレ教室」（以下、ムッレ教室）を事例として取り上げる。

1.2 「森のムッレ教室とは」

ムッレ教室とは、1957 年にスウェーデンで開発された 5～6 歳児対象の環境教育プログラムのことである。スウェーデンでは野外生活推進協会（Friluftfrämjandet）の推進のもと、ムッレ教室は全国約 500 の就学前学校で導入されており、幼児期からの環境教育を支える重要な役割を果たしてきた（岡部 2007）。日本には 1992 年にムッレ教室が紹介され、現在までに 4,000 人がムッレ教室のリーダー養成研修を受けているほか、全国で保育園を含む 36 団体がその実践に取り組んでいる（日本野外生活推進協会）。

ムッレ教室の目的は、「自然に出かけることは楽しい」ということを知らせること、自然の中で楽しく遊びながら自然に興味を持ち、自然を好きになること、エコロジーの理解の基盤を築き、自然感覚を育むことの 3 点に集約される（日本野外生活推進協会）。1960 年当初、スウェーデンでは地域の主婦のボランティアたちがリーダーとなりムッレ教室を実践していた。具体的な活動としては、子どもたちは天候に関わらず長時間を野外で過ごし、自然の中で遊んだり、自然について学んだりする。スウェーデンで女性の就労率が高まるとともにボランティアの担い手が少なくなった 1980 年代には、ムッレ教室の手法を取り入れた野外保育園が誕生する。このような野外保育園は、「I Ur och Skur」（日本語では雨の日も晴れの日もという意味）の認証をもつ就学前学校へと発展し、現在はスウェーデン全土に約 200 校存在する（Robertson 2008）。

1.3 問題の所在

ムッレ教室については数少ないものの国内での先行文献が存在する（清水 2003, 森下・中山 2010, 梅田・野田 2017）。報告者は、編著書『幼児のための環境教育—スウェーデンからの贈りもの森のムッレ教室』においてムッレ教室について、スウェーデン及び日本における発展の経緯についてまとめ

た（岡部 2007）。しかし、他の先行研究と同様、ムッレ教室の歴史的経緯や活動内容に触れられてはいるものの、その思想背景に関する議論は十分になされているとは言えない。井上はムッレ教室の課題として「プログラム化されているために本来の理念を理解していなくても誰でも実践可能となってしまう」と指摘している（2012, 197 ページ）。ムッレ教室の本来の理念とは何かという問いに応えるためには、スウェーデンという風土でいかなる思想的背景からムッレ教室が誕生したかを知ることが手掛かりとなるはずである。

1.4 調査の目的と意義

そこで本調査では、ムッレ教室の教育理念に影響を与えた思想背景を知ることによって本来のムッレ教室の意図や理念を明らかにすることを目的とした。本調査を通して幼児期に育まれる自然観のあり方の事例を提示することで、2015 年に国連総会で採択された「持続可能な開発目標（SDGs）」に保育がどう貢献できるか示唆を与える研究としたい。

本調査の成果は、日本自然保育学会への論文投稿を当面の目標とし、その後、2019 年 9 月に京都で開催予定の OMEP のアジア・太平洋リージョナル・カンファレンスにて英語による口頭発表を予定している。さらに、報告者の博士論文研究「幼児期のサステナビリティ教育の理論構築」において、「幼児期における自然との関係性」について本論の前半の構成内容として採用する予定である。

なお、本調査は、女性が多く活躍している分野である保育を領域として扱うものである。男女が共に持続可能な社会づくりに参画することの重要性は、SDGs の目標にも記されているところである。保育という観点から子どもとともに持続可能な社会の在り方を考えることを目指す本調査は、地球規模の課題を意識した保育者の育成を視野に入れたものであり、国際的な女性リーダーの育成に深く関わるものである。

2. 調査の方法と対象

本調査では、主にインタビュー調査の形式を採用した。さらにインタビュー内容を補足するものとして、就学前学校¹の視察調査と関連文献の収集を行った。なお、インタビュー調査及び就学前学校の視察調査に関しては、調査対象者を扱うことから適正な倫理的配慮のもとで実施するために渡航前に本学の人文社会科学部の倫理審査委員会より承認を得た（通知番号第 2018 - 81 号）。

2.1 インタビュー調査

インタビューはムッレ教室の創立当時の関係者を中心に行った。主たるインタビュー対象者は、ムッレ教室の創立者、ムッレ教室の教育手法の体系化を手掛けた人物 2 名、ムッレ教室を始めて保育園に取り入れ、「I Ur och Skur」の第一号園となった「A 就学前学校」の創立者、当時の野外生活推進協会リディンギョ支部会長、スウェーデン野外生活推進協会事務局長、I Ur och Skur の統括株式会社 VD I Ur och Skur Utveckling AB 代表者、ムッレ財団副理事長、これに加えて、A 就学前学校の現園長、A 就学前学校の元教師、A 就学前学校教師、A 就学前学校元保護者、A 就学前学校現保護者、B 就学前学校教師の計 14 名である。

その他、ストックホルム大学及びヨーテボリ大学において幼児期のサステナビリティ教育に関わる科目を担当している教員へのインタビュー調査により、現在どのように幼児期のサステナビリティ教育がそれぞれの大学において取り扱われているかの聴き取りを行った。

インタビューは、半構造化インタビューの形式にて各対象者につき 1 時間から 2 時間程度、対象者の指定する場所（ストックホルム市内または近郊）にて行った。各対象者には、事前にある程度の準備ができるように質問事項の概要について予め送付しておいた。使用言語は英語でのやり取りを報告者と対象者の間で行うこととした。しかし、特に年配の対象者の中には母国語であるスウェーデン語を希望する、または部分的な表現はスウェーデン語での表現を希望する方々もあり、その際には本調査のコーディネートを引き受けてくださった現地在住の方に通訳をお願いした。結果的には 7 割ほどの内容がスウェーデン語で語られることとなった。ただし、本調査の中核となる概念の表現に関しては、スウェーデン語の語彙に注意を払い、その微妙なニュアンスや含意を損なわないようにそのままスウェーデン語にて表現してもらった。インタビュー内容は、対象者に同意書への署名をいただいたうえで IC レコーダーに音声記録を残す、または手書きでメモを取った。

上記に加えて、ムッレ教室の社会的位置づけを知ること、またスウェーデンでのサステナビリティ教育の実践について理解を深めるためにストックホルム大学及びヨーテボリ大学におけるサステナビリティ教育関係者（計 7 名）にもインタビュー及び意見交換を行った。

2.2 就学前学校の視察調査

参与観察については、時間的制約のためインタビュー内容の補足という位置づけで 2 件の就学前学校への視察調査を行った。1 件目はストックホルム近郊の I Ur och Skur の第一号である A 就学前学校であり、2 件目はストックホルム市内のムッレ教室を部分的に取り入れている通常の就学前学校で

ある B 就学前学校である。A 就学前学校では、朝 9:00 から夕方 17:30 までの時間を視察した。一方、B 就学前学校では午前 9:00 から午前 11:00 までに行われた野外保育を見学したのち、教師及び関係者に野外保育のドキュメンテーション手法について話を聞いた。

2.3 関連文献の収集

さらにインタビュー内容を補足するために関連文献の収集を行った。当初はストックホルム図書館に訪問する予定であったが時間的な制約につき実現できなかった。その代替として、学術書専門店 Akademibokhandeln にて関連文献の収集を行ったほか、インタビュー対象者より関連文献を寄贈もしくは借用させていただくことができた。

3. 調査内容と成果

以下では、調査手法ごとの内容と主な成果を記載する。

3.1 インタビュー調査

各インタビュー内容は研究の一次資料として位置づけ、IC レコーダーの音声データを文字データに変換したのちに分析を行う計画である。音声データは合計 24 時間を超える量があり、現在、文字データへの変換作業中につき、ここではその概要を報告することとする。本インタビューでは主に「野外生活」及び「自然感覚」の 2 つの概念に焦点を絞った。以下に、その概要を記す。今後、これらの概念をより大きな社会的文脈において解釈を加えたうえで、具体的にインタビューで語られた言葉を用いて論文を執筆する予定である。

3.1.2 「野外生活 (Friluftsliv)」の概念について

本調査において着目した概念の一つは、北欧の自然観で最も影響力のある要素の一つと考えられる「野外生活 (Friluftsliv)」である。その「野外生活」の概念とは、ある目的をもった野外活動ではなく、自然体験そのものに哲学的な価値を見出す行為である (Reed and Rothenberg 1993, Henderson and Vikander 2007)。ムッレ教室の推進母体は野外生活推進協会 (Friluftframjandet) であるが、この団体が Friluft (日本語で野外) という名を冠していることから、ムッレ教室は「野外生活」の概念と深い関わりがあるはずであるという推察をもとにこの概念を分析視点として採用した。

まず明らかとなったのは、インタビュー対象者であるムッレ教室の関係者が、幼少期からキャンプ、野外食、散歩、ウィンタースポーツなどといったいわゆる野外活動をライフスタイルとして実践しているということであった。具体的には、彼女らは児童期にはスカウト活動 (当時はムッレ教室がまだ存在しなかった) もしくは家族とともに野外に一年を通して出かけることを習慣としていた。

また、インタビューで「野外生活」についての概念を言語化してもらうプロセスにおいて野外生活がスウェーデンにおいては定義づけはなされていないものの特別な意味をもつ概念であるということが分かった。先行研究から、この「野外生活」の概念は、19 世紀後半のロマン主義運動に端を発し、ノルウェーとスウェーデンを中心に北欧という風土で醸成された、いわば伝統的な風習であることは分かっていたが (Reed and Rothenberg 1993)、インタビュー内容はこれに合致するものであった。今回の調査でスウェーデンにおいてムッレ教室によって「野外生活」の精神が今日にも継承されていることが明らかとなった。特に、スウェーデンでムッレ教室を初めて導入した野外保育園の設立者へのインタビューで、野外保育園の設立は、この「野外生活」の実践を保育に応用したものであるとの直接の回答を得たことで、事実確認ができたことは大きな成果であった。今日「I Ur och Skur」の認証をもつ野外就学前学校では、この「野外生活」のライフスタイルと幼児教育手法を組み合わせることによる相乗効果を利用した実践と言える。

3.1.2 「自然感覚 (Naturkänsla)」の概念について

本調査においてもう一点着目した概念が「自然感覚 (naturkänsla)」である。これは、野外生活推進協会が刊行するムッレ教室のリーダー養成講座のテキスト等に表記されている概念である (Johansson 1989)。日本語表記の「自然感覚」という言葉自体は、スウェーデン語からの訳語であり、もともと日本語にはない言葉であるため、ムッレ教室の思想背景の手掛かりとなるのではないかと判断し採用した。

この概念については、ムッレ教室の創始者の一人であり、リーダー養成講座の最初のテキスト執筆者とのインタビューにより深い理解につながった。また、その他のインタビューからは、ムッレ教室の関係者の間では、自然感覚という言葉が一般的に使われていることが分かった。しかし、その解釈は多岐にわたっていることも同時に明らかとなった。このことから、この言葉もまた野外生活と同様に一定の定義があるわけではなく、風習として伝承されてきたものであると考えられる。また、「自然感覚」という言葉が、スウェーデンを起源とするものなのかという疑問が生じたものの、この点については判明しなかった。

この概念の多義性と先述の野外生活との関連性は、ムッレ教室の思想の根幹を支えるものであり、

そのルーツを見出す手掛かりとなった。論文ではこの論点を中心に執筆する予定である。

3.1.3 ヨーテボリ大学イングリッド・サミュエルソン教授へのインタビュー

今回、ストックホルム大学及びヨーテボリ大学にて教員へのインタビューを行った。なかでも、ヨーテボリ大学では、イングリッド・サミュエルソン教授からお話を聞くことができた。サミュエルソン教授は、OMEPやUNESCOにおいて幼児期のサステナビリティ教育の研究プロジェクトをけん引してきた中心人物である。彼女からは、幼児期のサステナビリティ教育では「ただ単に自然と触れ合うだけでは十分ではない」とのコメントをいただいたうえで、幼児期のサステナビリティ教育の重要な要素として「環境だけでなく、社会と経済の側面も考慮すること」「国連の持続可能な開発目標に述べられた価値観についての学びをスタートすること」「子どもの積極的な参画を促進すること」などの話をお聞きすることができた。

3.2 就学前学校の視察調査

本調査ではA就学前学校とB就学前学校の2校にて視察調査を行った。

3.2.1 A 就学前学校

A就学前学校では、午前中の野外保育に同行し、継続して閉校までの終日を学校で過ごした。朝9時に4~5歳児クラスで野外に出かける準備ができた子どもたちは門の前に集まり、歌を歌ってから学校を出発した。途中、3箇所立ち止まり、遅れてくる子どもを待つ調整に充てるほか、そのポイントごとに決まて行うことをしていた。3か所のうち2か所はファンタジーを活用するものであった。1か所ではワニの通り道を抜けるという設定でありそこではワニに関する歌を歌った。もう一か所では岩の穴に住む妖精と手紙のやり取りを行った。

その後、森に入って丘を登ると活動拠点に到着する。そこに敷物を敷いてサムリング²が行われる。サムリングでは、チョウのライフサイクルについて先生がぬいぐるみを用いて寸劇をしたのち、子どもたちとその成長プロセスについての議論がなされた。先生からチョウに関する疑問が投げかけられ、それに対して子どもたちが自らの経験を語るといったように、先生と子どもの対話によって議論が展開していった。

その後、自由遊びの時間となる。子どもたちは、鬼ごっこ、基地での遊び、おしゃべり、松ぼっくりでマンダラづくりなど、思い思いに時間を過ごす。先生もよく子どもと交わりながら遊んでおり、子どもとの会話に加わったり、マンダラづくりを一緒にしたりしている。最後に先生が主導する集団でのゲーム10分ほど行って帰園した。帰園してから、給食を園舎のデッキにあるテーブルと椅子に3班に分かれて先生と一緒に食べていた。

テーマ活動を継続して行っており、現在取り組んでいるテーマは「チョウ」であった。園舎にはその時のテーマ活動のモチーフを用いて子どもの疑問などがリストになっているものを見ることができる。これは、ドキュメンテーションの一形式とも言えるものであった。

本稿での視察は、ムッレ教室の理念がどのように実践されているか、大まかな内容の把握ができた。論文では、この実践を先述の「野外生活」と「自然感覚」の視点から分析して論じる予定である。

3.2.2 B 就学前学校

本視察調査では午前9:00より野外保育に同行し、その内容を見学した。本校は、異年齢(1歳~5歳児)クラスを3つ有しており、各クラスには約18人の子どもがおり、3人の教師がついていた。一つのグループに同行し、森での活動を見学した。まず根拠地に到着するとA就学前学校と同様にサムリングが行われた。今日のテーマは野鳥であった。教師が、布袋の中から野鳥の写真を一つずつ見せると、子どもたちはその特徴を話し合っていた。子どもたちが知っている鳥が出てくるとその鳥の話を深めていく。例えば、冬鳥であれば渡りについての議論がなされた。鳥の名前を知っている子もいれば知らない子もいるが、先生が写真を見せたあとには、その鳥名が書かれている札を並べる。このようにして、約10種類ほどの野鳥が並べられると、次はこの野鳥が何を食べて生きているかを話し合った。また最後には、冬に野鳥がこれらの食べ物が無くなって困っているときに、どんなことができるかを子どもたちと話し合った。

見学を終えると、職員の休憩室で教師が学校で取り組んでいるドキュメンテーションについての説明をしてくれた。3通りの手法を用いており、一つはファイルに入れる書面タイプの一般的なものの、もう一つは子どもたちの個人の様子を各保護者にソフトフェアを通してスマホに送るタイプのもの、最後にもっとも興味を引いたのは子ども自身がリフレクションしながら写真の解説を行う壁に貼るタイプのものであった。子どもの権利条約を実践するために、子ども自身がドキュメンテーションに参加することを進めていた。本視察で得られた野外保育の内容は論文で採用するほか、ドキュメンテーションの部分は民主主義の実践例として博士論文計画の後半の部分で採用する予定である。

3.3 関連文献の収集

本調査では下記の文献を入手した。特に②は現在入手できる数少ないムッレ教室創立者の著書であ

り、思想的な背景をたどることのできる貴重な資料である。下記の資料については論文にて主に一次資料として使用する予定である。

- ① Brügge B., Glantz M. and Sandell K. (2018) *Friluftslivets Pedagogik*, Stockholm: Liber AB.
- ② Johansson, S. (1982) *Runt i Naturen 2*, Stockholm: Utbildningsraion.
- ③ Rännar C. (2016) Nysatsande, Friluftsliv 1-2016, Stockholm: Friluftfrämjandet.
- ④ Westerlund, A. (2018) *Växtkraft– Natur och Växtkraft för Alla*, Karlskrona: Norrtälje.

4. 今後の課題

本調査の最大の目的は、ムッレ教室の思想背景を知ることであった。関係者のインタビューから、その理解に結び付く数多くの証言を得ることができたことは大きな成果であった。なかでも、スカンジナビア独特の「野外生活」や「自然感覚」という概念の中に、その思想をたどる手掛かりを見出すことができた。

一方、課題として、今回は、視察の時間が短かったため参与観察が不十分であり、大まかな内容の把握はできたものの、実践面での本格的な検証に必要なデータが得られていない。本調査の成果をもとにした論文の執筆にあたるなかで、実践についての本格的な調査が必要な場合、どの程度の参与観察が必要となるかを検討していきたい。

そのほか、今回の調査の成果をもとにして次の3点の展開を計画している。

1 点目は、本調査でも主要概念として焦点を当てた「自然感覚」というものが保育実践においてどのように深化し、子どもの変容行動として表出するのか、そのプロセス及び計測について検討することである。この点に関しては、本調査で接点をもったストックホルム大学元講師から報告者への提案があり、日本とスウェーデンでの共同研究の可能性の議論がなされた。自然感覚についての理解を深めることで博士研究計画の前半部分に寄与することを期待している。

2 点目については報告者の博士論文研究計画「幼児期におけるサステナビリティ教育」についてである。博士論文研究計画において報告者は、子どもの自然感覚と民主主義の接点に着目している。スウェーデンでは50年間に及ぶ社会民主主義政府の統治の成果として、平等と民主主義の価値観が高く評価されてきた。幼児教育においても民主主義の実践が伝統として根付いている (Samuelsson 2017)。そこで、博士研究計画の後半部分では、この民主主義に基づく幼児教育に焦点を当てる予定である。特に今後、スウェーデンの幼児教育の関係者が、保育実践をどのように持続可能な社会づくりに結び付けようとしているかの理解を深める必要があると考えている。

最後となる3点目は、報告者は現在、国内でのフィールド調査として都内の保育園でのアクション・リサーチを行っている。本調査で得られた知見を調査対象園での保育実践に生かすことで、日本という社会文化的背景でいかに応用が可能か課題を含めて調査していきたい。

5. 謝辞

本調査にあたり、インタビューにご協力いただいた方々、視察調査を受け入れてくださった就学前教育学校のご関係者には大変感謝いたします。また、今回の調査のために関係者へのインタビュー設定および就学前教育学校の視察調査の調整を行ってくださったスウェーデン在住の高見幸子氏に心より御礼申し上げます。

本調査への助言をいただいた指導教員の刑部育子先生に感謝いたしますと同時に、本調査を実施する貴重な機会をいただき、きめ細やかな支援をしてくださった本プログラムのご関係者に厚く御礼申し上げます。

注

1. スウェーデンでは、保育園・子ども園・幼稚園という区別はなく、保育と就学前教育は「就学前教育学校」として統合されており、教育庁の管轄下にある。
2. サミングとは、子どもたちと先生が輪になって座りトピックについて話し合うこと。スウェーデンの就学前教育学校では一般的に行われる活動である。

参考文献

- 井上美智子 (2012) 『幼児期からの環境教育 - 持続可能な社会に向けて環境観を育てる』昭和堂。
- 梅田裕介・野田敦敬 (2017) 「幼児の生命尊重の態度育成におけるムッレ教育の可能性」『愛知教育大学研究報告 教育科学編』66,9-18。
- 岡部翠 (2007, 新姓: 光橋) 『幼児のための環境教育 - スウェーデンからの贈りもの森のムッレ教室』新評論。

- 清水麻紀・高見豊・足立邦明・荻野尚子・田中春彦 (2003) 「地域における就学前段階からの自然体験型学習の重要性－妖精ムッレ活動の事例を中心として」『環境教育』Vol.12-2, 35-44.
- 日本野外生活推進協会ウェブサイト <http://mulle.sakura.ne.jp/> (accessed September 27, 2018)
- 森下絵美子・中山智晴 (2010) 「幼児向け環境教育『森のムッレ教室』が参加者に与えた影響」『文京学院大学人間学部研究紀要』Vol. 12, 11-20.
- 文部科学省 (2018) 「幼稚園教育要領」.
- Davis, J. (2014) *Research in Early Childhood Education for Sustainability – International Perspectives and Provocations*, New York: Routledge.
- Elliott, S. (2015) *Children in the Natural World, Young Children and the Environment*, Cambridge, 32-54.
- Henderson B. and Vikander N. ed. (2007) *Nature First – Outdoor Life the Friluftsliv Way*, Toronto: Natural Heritage Books.
- Johansson S. (1990) *Bland Stubbar och Kottar*, LTs Förlag. (高見幸子(訳)1997『自然のなかへ出かけよう』日本野外生活推進協会)
- Reed P. and Rothenberg D. ed. (1993) *Wisdom in the Open Air*, Minneapolis: University of Minnesota Press.
- Robertson (2008) *I Ur och Skur “Rain or Shine” the Swedish Forest School*, Creative Star Learning Company. <http://creativestarlarning.co.uk/wp-content/uploads/2013/06/Rain-or-shine-Swedish-Forest-Schools.pdf> (accessed September 27, 2018)
- Samuelsson I. and Park E. (2017) How to Educate Children for Sustainable Learning and for a Sustainable World, *International Journal of Early Childhood*, 49: 273-285.
- Taylor, A. (2013) *Reconfiguring the Natures of Childhood*, New York: Routledge.

みつはし みどり／お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 人間発達科学専攻

指導教員によるコメント

幼児期のサステナビリティ教育については、OMEP（世界幼児教育・保育機構）において最も活発に議論されているテーマであるが、日本ではまだ萌芽期にある研究分野であると言える。そのうえで、本研究分野において先進国であるスウェーデンに着眼した本研究には大きな意義がある。特に、今回調査で OMEP 前総裁イングリッド・サミュエルソン教授に直接会って話を聞き、スウェーデンのサステナビリティ教育の最前線の知見を得たことは極めて有意義であったと言える。また、ムッレ教室の創始者とのインタビューが実現したが、創始者がご高齢のためこれが最後のチャンスとなる可能性があることを考えると、ムッレ教室思想の源流を突き止める貴重な機会であった。

本報告書から、光橋さんは今回の調査において、綿密な計画の上に現地との広いネットワークを駆使し、大きな成果を上げることができたと言える。今回の調査は、博士研究計画の一環として行われたものであるが、日本における幼児期のサステナビリティ教育の発展及び国際的な女性リーダーの育成にも貢献することが期待される極めて重要な調査であったと考えられる。

(基幹研究院人間科学系准教授・刑部育子)

Theory and Practice of Swedish Early Childhood Educational Program “Skogsmulle”

Midori Mitsuhashi

This study addressed the theme of “learning for sustainability in early childhood”. As an exemplary case, an outdoor program called “Skogsmulle”, established in 1957 in Sweden, was focused. Its original ideals were closely examined by interviews with 14 people who have been involved in development of its pedagogy. The study revealed that Skogsmulle had deep roots in the concepts of “Friluftsliv (open-air life)” and “Naturkänsla (nature-feeling)”, which were both indigenous to Scandinavian culture. Findings of this study will offer a number of implications on how early children can build positive relationship with more-than-human world, which is considered to be an important element for learning for sustainability.